館報 おかだ

きれいな環境づくりに努めよう

≪初の夜間訓練！≫
～平成28年度～
岡田地区防災訓練

「やってみないとわからない」今回の訓練で聞かれた言葉です。

防災意識の高まる昨今。3月4日（土）、岡田地区でも、「いつ地震が起こるかわからない。」と夜間の防災訓練が行われました。毎年午前中に実施していましたが、今年は、夜間訓練となり、夕方17時から21時ごろまで行われました。

なぜ夜間訓練を行ったかを、田口連合町会長に伺ったところ、「夜間に避難訓練を行うのは、いつおこるかわからない災害に備え、その時に焦ることがないよう、暗い中での避難訓練をやっておく必要を感じたので。」との説明がありました。

まず、17時に各町会で訓練指示内容の放送が流れ、常会ごとに安否確認後、各町内公民館に集合し、集計。18時30分からは岡田体育館にて、岡田地区全体の防災訓練を行いました。

体育館の中では、各町会でまとまり集合。避難所設営班、救護班、情報・広報班、給食・給水班などにわかれ、活動を開始しました。

救護班では、実際に簡易トイレ、簡易ベッドを皆で作成。「疲れたが、いい経験になった。」との声も多く聞かれました。情報・広報班では、安否確認、被害状況の集計を行い、岡田地区の総人口7218人、避難者968人、在宅1729人、留守1255人の報告がありました。給食・給水班では、炊き出し訓練として、〝とん汁うどん〟を作り、盛り付け・配食までを行いました。

すべての訓練が終わった段階で、「実際に館内の電気を消します。暗さをを体験しましょう。」と、発電機を使用した投光器のみの明かり（暗さ）を体験しました。

避難者名簿の作成

被害状況の集計

その後、講評・感想の発表があり、「お互いの協力、声かけが大事だと思った。」「高齢者をどう避難させるかが問題だと思った。」「家に帰ったら家族に訓練をやってみようと伝えたい。」などの声が聞かれました。

昨年度より、女鳥羽中学校の生徒がボランティアとして参加していますが、今年は、20名が参加し、それぞれ所属した班で活動を行いました。

角崎雅武生徒会長は、「今後に生かせればと思い、訓練に参加しました。準備から関わらせていただく中で、こんな風に避難所ができていくのがよくわかったので、もし、災害が起きた時は、いろんな人達と協力したいと思いました。」と語ってくれました。

いつ起こるかわからない災害。今回のような訓練を定期的に行う中で、参加者が増えていき、いざという時のために備えていけたら良いと感じました。

（取材　日比）

段ボールを組み立てて簡易ベッドを作る

炊き出し訓練

人物登場

岡田地区紅一点の消防団員

松岡
田内 知里 さん

田内さんは、岡田地区の消防団（松本市消防団第17分団：団員数55名）でただ一人の女性団員です。長野市のご出身で、10年以上前にご主人と松本へ転居され、今は2歳の息子さんと3人暮らしです。転居された当時は、アパート暮らしということもあって地域との関わりの薄さを感じられたそうです。初めは松本市消防団の女性部に入られましたが、妊娠を機に、地域の中で子育てをしたい、そのために自分から積極的に地域に関わりたいと思われたのが、岡田地区の分団に入るきっかけだったとのことです。老人保健施設の相談員としてフルタイムで働きながら、活動には息子さんをご主人に預けて参加されています。

消防団の活動は、基本的にボランティアであり、余り皆さんに知られているとは言えないようです。毎月15日の「市民防災の日」の見回り、地区の防災訓練への参加、春・秋と三九郎時の火災予防活動、歳末警戒活動、冬場の消火栓凍結防止、不審火の際の見回りの強化、東山ブロックでの山火事を想定しての訓練など、様々な活動をされています。消防団は、様々な世代、職業の方が参加しており、団員同士の交流を通して見聞が拡がること、地域密着型なため地域とのつながりが深まることが魅力と田内さんは語ります。都会で「パパ友」の集まりに参加していた男性が、地域のお父さんと話がしたくて消防団に入った例もあるそうです。

近年、特に若い人たちの中に地域の活動に関心が乏しく、消防団もなかなか人が集まらず、定員割れしているところもあるとのことです。そんな中、地域とのつながりを大切にしながら活動されている田内さんの姿は、とても凛々しく頼もしく感じられました。消防団の活動に関心のある方は、市の消防防災課に気軽に相談してくださいとのことです。

（取材　平林）

田内 知里さん

2/5・6 オール岡田の文化の粋を集めて

第45回新春サークル発表会

5日のステージ発表では10のサークルが登場。童謡・民謡・太極拳など、日頃の練習の成果を披露しました。初出場、西アフリカの太鼓とダンスのサークル「サブニュマ（素敵な出会いの意）」の奇抜な衣装とノリノリな演奏で会場のボルテージも最高潮。また、「ザ・ホリデーベンチャーズ」の9才のドラマーの巧みなバチさばきには会場から驚きの声。信州大生も爽やかな吹奏楽や合唱を披露しました。トリは地域づくりセンター劇団による認知症の啓発寸劇。大いに笑わせながらも、地域で見守る大切さを訴えました。休憩時には、三水会により伊深産のそば粉と源池の水で打ったそばが全員に振る舞われました。

おばあちゃんも無事帰宅

展示部門では写真・絵画・手工芸・洋裁・生け花・絵手紙等々、18のサークルの作品と、各町会の文化祭から推薦された作品などが並びました。オルゴールの音に合わせて踊るからくり人形、信州の自然を一瞬に切り取った美しい写真、華やかな生け花、珍しいわら細工など、見学者は足を止めて見入っていました。

（取材　石神）

多彩な展示作品の数々

2/19 講演「高齢者住宅の選び方と住まい方」どう生きたいか どう老いたいか

「第19回福祉を語る集い」が開かれました。講師はサービス付高齢者向け住宅「結」グループの介護指導専門員の井上真琴氏。介護福祉施設は特別養護老人ホーム・老人保健施設・グループホーム・療養病床・ケアハウス・介護付有料老人ホーム・住宅型有料老人ホーム・養護老人ホーム・サービス付高齢者向け住宅等多種多様ですが、講演ではその違いや特徴（対象者の年齢、どの程度の介護や療養が必要か、認知症の有無、費用の目安、住宅と施設の違い等）を書き込み式の資料を用意して、わかりやすく話してくれました。実際に入所している人の一週間のタイムテーブルなども紹介し、どの選択をするかと言う事は「どう生きたいか、どう老いたいか、どう逝きたいか」を考えること、と話を締めました。

「居室の広さは？」「ターミナルケア（看取り）までするのか？」「待機老人はどのくらい？」など質問が続出して、時間が足りない位で、関心の高さが伺われました。

また、講演の前には、市の担当者が岡田も推進モデル地区になっている「地域包括ケアシステム」構築のプロセス、住民勉強会の様子を説明、後半は岡田にある介護保険事業所のうち「岡田の里」「となりの縁側」「むつみの郷岡田」の3箇所の担当者が、事業所の特徴や入所者の現状を話し、理解を深める事ができました。

（取材　石神）